



宮澤賢治が新造した薙露青の意味

亡くなった人を「青びと」と形容する宮澤賢治（1896-1933年）は、「薙露青（かいりせい）」という色名を1924年7月17日に新造している。賢治は、修羅界に生きることを望み、「悉皆成仏」（しっかいじょうぶつ：万物すべて成仏するという考え）を信じていた。

詩集『春と修羅』第二集で、「薙露青の聖（きよ）らかな空明（くうめい：水に映る月の光）のなかを／たえずさびしく沸き鳴りながら／よもすがら南十字へながれる水よ」（『新校本宮澤賢治全集』第3巻、詩Ⅱ本文篇、105頁）と表現している。この色名は、幻想的な宇宙感覚の水を描写している。

薙露青の「薙」の訓読みは、「らっきょう」で、中国原産のユリ科の多年草を表す。一般的には「ニラ」を意味し、葉の幅が狭い。その葉の上に付いた露は消えやすいことから、薙露は古くから、人の世・人命のはかなさや、人の死を悲しむ涙を意味する。貴人の葬送の際にうたう挽歌・哀悼歌の意にも用いられる熟語である。薙露青は、ただの青さを表すだけでなく、宮澤賢治の2歳年下の妹、と子どもの死を悼む賢治の悲しみ・悲哀感を反映した色名になっている。 (吉村耕治)

源氏物語の色 — 42 「御法」

光源氏五十一歳の年、正妻である紫の上は四十三歳。

大病以来、四年ほど病身であったが、いっそう衰弱が目立つようになっていた。紫の上は出家を望むが、光源氏は別に暮らす決意が付きかねてそれを許さずにいた。

三月十日の花盛りに二条院にて、法華経供養が盛大に行われ、紫の上は参列した花散里、明石の君といった光源氏の妻達と歌を詠みかわし、それとなく別れを告げる。

八月、紫の上は死去し、即日葬送された。その顔はとても白く光るようでたぐいまれなる美しさであったと描かれている。

その後の到仕の大臣の弔問の場面で、かつての正妻の葵の上（致仕の大臣の妹）が亡くなったときに、歌に詠んだ「薄墨衣（うすずみごも）」より、さらに濃い色を光源氏がまとっていると記されている。

薄墨衣とは薄墨色に染めた衣服で、喪服のこと。第9帖「葵」で、「喪服」の歌語として、亡き葵の上を悼む光源氏の歌に詠まれた「薄墨衣」。

これを回想して紫の上への弔意と比較することで作者は光源氏の悲嘆の大きさを表しているであろう。 (平山和香子)

●大辞泉ひろいよみ 2—あ

青い：青色をしている。碧いとも書く。広く緑系統の色にも言う。蒼いとも書く。

青色：青系統の色。染め色では紫根と刈安で染めた灰色がかかった黄緑色。織り色では縦糸を青、横糸を黄として織った色。

青蛙：アマガエルなどの緑色の蛙。

青金：金に銀20%程度入れた合金。

青菜：緑色の葉菜。カブの古名。

青丹：青黒い土。緑色の顔料の土。岩緑青。染め色の名。あおに。

青鈍：あおにび。染め色の名。薄墨色。仏事や喪中の時に用いた。

青葉：緑色をした草木の葉。

青花：ツクサの別名。花卉からの染料。

青花紙：友禅などの下絵描きの染料。

青緑：青みを帯びた緑色。アオミドロの古名。

青紫：青みを帯びた紫色。

青紅葉：まだ紅葉しないカエデ。襲の色目。

赤：色の名。三原色の一つで新鮮な血のような色。その系統の緋・紅・朱・茶・桃色などの総称。

赤糸威：鎧の威の一、茜または蘇芳で染めた糸を用いた威。

赤絵：赤色を主として彩色を施した陶磁器。その絵。宋赤絵・伊万里赤絵の類。 (永田泰弘)